

## 非認知能力としての思考力 —哲学的観点から—

宮崎公立大学 准教授 川瀬 和也

### はじめに

#### ●学校教育と非認知能力

近年、幼児教育から企業の人材育成に至るまで、教育に関するあらゆる分野で「非認知能力」を育成することへの関心が高まっている。非認知能力とは、従来型の記述試験では測定しにくい、単なる知識を超えた探究や自己調整、感情や共感に関わる諸能力である。

現行の高等学校学習指導要領（平成30年告示）においても、「知識・技能」を習得させることに加えて、「思考力・判断力・表現力」を育成することと、「学びに向かう力、人間性」を涵養することが目標に掲げられている。「思考力・判断力・表現力」と「学びに向かう力、人間性」は大まかに非認知能力に対応するだろう。したがって高等学校においても、非認知能力を育むことが求められていることになる。

本稿ではこの非認知能力と結びつく思考力とはどのような能力であるのか、哲学の観点から論じたい。「思考」については、人であることなしは理性的な主体であることの根幹を成す能力として、哲学の歴史の中で関連する議論が蓄積されてきた。こうした議論を参照しながら、現代人に求められる思考力とはどのような能力なのかを考えてみる。

### 非認知能力としての思考力

#### ●さまざまな「思考力」

「思考力」という言葉によっては、思考のプロセスにおいて働く複数の能力が、渾然一体となった仕方で理解されているように思われる。一口に「思考力を育てる」と言っても具体的に何をすればいいのか、あるいはどうすれば思考力を評価することができるのか、にわかにはわからないの

は、そもそも思考力とは何かがはっきりしないからでもあるだろう。

思考のプロセスにおいて必要な能力のうち、注目されやすいのは「論理的思考力」であろう。これは大まかに言えば、概念や命題の間の結びつきのパターンを理解し、そうした理解に基づいて他者の論証を評価したり、自ら推論したりする能力である。この能力は、煎じ詰めれば、抽象的なパターンないし規則を覚えて、それを具体的な場面に適用する能力だと言えよう。

論理的思考力は確かに、人間の思考プロセスにおいて重要な役割を担っている。しかし、非認知能力としての「思考力」の中心をなす能力だと言えるかは疑わしい。なぜなら、論理的思考力はむしろ「認知能力」に近い特徴を多く持っているように思われるからである。認知能力の代表としてしばしば計算力が挙げられるが、推論の論理的な妥当性を評価するプロセスは計算のプロセスに類似している。実際、現代の論理学は数学と密接に関わる学問分野であり、そのことは大学レベルの現代論理学の教科書を開けば一目瞭然である。その多くは集合論や写像といった数学基礎論の初歩を解説することから説き起こされているからだ（ただし、念のため付け加えれば、このことは勿論、論理的思考力が簡単に身に付けられるということや、重要でないということの意味しない。従来型の認知能力の一種であるとは言っても、高度かつ重要な能力であることに変わりはない）。

私の考えでは、非認知能力としての思考力は、こうした論理的思考力という基礎的な技能を前提にすることで可能となる、様々に分化した思考のことである。その中には、批判的思考、科学的思考、仮説的思考等と呼ばれるものが含まれるだろう。思考力を育み、また評価するためには、まずは「思考力」がこうした複数の層から成ると知ることが必要であるように思われる。

## ●思考力と「考え抜く力」

小学校から高等学校までの学校教育では思考力の育成が叫ばれているが、大学での高等教育においては、「社会人基礎力」を育むことが求められるようになってきている。社会人基礎力とは、経済産業省が提唱する、職業人として社会を生き抜くために、大学生のうちに身に付けておくことが求められるスキルのことだ。提唱しているのが経済産業省であることからわかる通り、大学での学びと職業人としての人生を接続するための概念であると言える。学校教育の大目標に掲げられる「生きる力」に対応するものと考えてもよいだろう（ちなみに、文部科学省はこれとは別に「学士力」という概念を提唱している。近年の大学行政は文部科学省と経済産業省の綱引きの様相を呈しており、大学はそれに巻き込まれながら航路を手探りしているのが現状だ）。

社会人基礎力は、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の三つの能力から成るとされる。これらの能力の重要さが最初に提唱されたのは2006年のことであったが、これは教育における非認知能力への関心の高まりと軌を一にする動きであったと言うこともできるだろう。2017年には「人生100年時代を生き抜く社会人基礎力」としてマイナーチェンジが施され、現在でも大学教育や人材育成の現場では無視することのできないテーマとなっている。

これらのうち、学校教育で育むべきとされる「思考力」と最も関連が深いのは、「考え抜く力」であろう。経済産業省の資料では、「考え抜く力」について、「論理的に答えを出すこと以上に、自ら課題提起し、解決のためのシナリオを描く、自律的な思考力が求められている」とされている。先述の思考力の内実に鑑みれば、ここでも単なる認知能力としての論理的思考力を超えた、非認知能力としての思考力の育成が求められていると理解できる。

## ●考え抜く力と弁証法

これまで、非認知能力としての思考力、あるいは「考え抜く力」の育成が、高等学校においても大学においても求められていることを確認してきた。しかし、非認知能力としての思考力、「考え抜く力」とは、より具体的にはどのような力なの

だろうか。

ここで、19世紀ドイツの哲学者G. W. F. ヘーゲルの思想にヒントを得て、「考え抜く力」とはどのような能力なのか、より深く考えてみたい。ヘーゲル哲学の最重要概念は、周知の通り「弁証法」である。ヘーゲルの弁証法的な思考をヒントに、高校生に身につけさせるべき思考力とはどんなものかを考えてみたい。

弁証法という言葉はしばしば、テーゼ（正）とアンチテーゼ（反）を止揚することでジンテーゼ（合）を生み出す思考法だと言われる。高等学校の公民科の教科書でもこのような記載がなされることがある。この理解では、対立を調停して折衷案を生み出すための思考法が弁証法だということになる。

しかし、実際のヘーゲルの文章を読むと、「弁証法」という言葉から受ける印象はこれとは異なる。弁証法という言葉はむしろ、対立が存在する問題含みの状況を受け入れながら思考することそのものを指して用いられる。言い換えると、ヘーゲルの「弁証法」の要点は、折衷案・解決案を生み出すことよりもむしろ、問題状況、対立状況に気づき、その状況を受け入れることの方にある。ヘーゲルの哲学は、このようなどっちつかずの状況、したがって問題が未解決の状況を受け入れることで成り立っている。

私はこのような意味で理解された弁証法から、「考え抜く力」とは何か、思考力とは何かということを理解するためのヒントを取り出したい。単なる論理的な思考を超えた、非認知能力としての思考力、考え抜く力を発揮するにあたって重要なのは、問題状況に気づき、それを受け止める能力である。問題状況を受け止めるためには、一見すると素晴らしい解決策に思われるような主張に、簡単に飛びつかず、一旦立ち止まって吟味する姿勢が求められる。この姿勢は批判的思考や科学的思考と呼ばれるものとも重なるであろう。また、「これが正解ではないか」という自分自身の考えそのものを相対化し、それが誤っている可能性を常に頭に入れておく必要もある。これはすなわち自分自身の考えを真偽が未決の「仮説」として理解するということであるから、仮説的思考と言うこともできよう。

## ●「常識を疑う」を超えて

哲学は常識を疑う学問だとしばしば言われる。問題状況に気付き、見解を相対化することとしての思考力は、まさにこうしたイメージとぴったり符合するように思われるかもしれない。しかし、その印象は半分しか正しくない。確かに思考力を持つ人は、常識を疑うことができるのだが、同時に常識以外のものがそれ以上に疑わしいということにも気付いていなければならない。多くの人が正しいと信じている常識すら疑わしいのなら、まして常識を外れた自分自身の考えや、身近な人の考えを簡単に信じてよいはずはない。このことに気付かなければ、一時期話題になった「陰謀論」に絡め取られてしまうかもしれない。

それだけではない。全てを疑うだけの思考力であれば、成果を生み出す創造性につながらないだろう。全てが誤りうるということ、すなわち、全てが揺らぎうる仮説であるということを理解しながら、それでもなお諦めずに真理や解決策を追い求めることこそ、現代に求められる思考力である。疑うことはそのための出発点でしかない。また、一旦疑いを止めて、正しくはないかもしれない自分の考えを仮説として表明することも必要である。それによってこそ、自分の仮説に含まれる問題を見つけ出すことも可能となる。

論理的な思考力を基礎としながら、常識を疑い、自己を疑い、他者を疑うこと。それでもなお、解決策を諦めずに探し続けること。この困難な課題を遂行する能力こそ、考え抜く力であり、非認知能力としての思考力であると私は考える。

## 思考力と自己コントロール

### ●考え抜くことの苦しみ

前節では、全てを疑い、仮説として受け止めながらも、解決策を探し続ける能力が思考力であると論じた。この意味での思考力を発揮するためには、言語を用いたり正しく計算したりするスキルに加えて、自らの感情や欲求を適切に抑制しコントロールする力を修得する必要がある。したがって、思考力を育てるためには、「考える」という言葉のイメージを超えた、総合的な非認知能力を育てる必要がある。

なぜ思考力を発揮するために自己コントロール

が必要なのだろうか。それは思考のプロセスの中でどうしても必要な疑いのプロセス、言い換えると相対化のプロセスが、独特の苦しみを伴うからである。大学で哲学の授業中、ときおり感想として、怒りに似た反発のコメントが学生から寄せられることがある。「そんなにいろいろなことを疑って何になるのか」、「結局何が正しいかはわからないのだから考えても無駄ではないか」といったコメントだ。こうしたコメントに対しては、「何が間違っているかわかった」ということもわかったことの内である、といったことを応じることになるのだが、本稿の目的にとって重要なのはそのことではない。ここではむしろ、こうしたコメントを寄せる学生が感じているはずの不快感に着目し、それに寄り添いたい。

深く考えることが不快感を伴う理由を想像するのはそれほど難しくない。一つには、自分自身が正しいと信じて疑わなかった信念を相対化し、それが誤っている可能性を視野に入れなければならないからであろう。その信念に対する確信が深ければ深いほど、それが誤っていると認めることは、自分自身を否定されたかのような苦しみを伴うだろう。考えを否定することと人格を否定することは異なるとわかっているとしても、考えを否定されることの不快感を完全に消し去ることは難しい。しかも、思考力を発揮するには、自分からわざわざ自分の考えを否定して、不快感を味わいに行くようなことをしなければならない。

もう一つ、考え抜くことの不快さとして、拠って立つ基盤がなくなるような不安感を挙げることができるだろう。考え抜くことは、自分の考えだけでなく、頼りにしていた常識や信頼する知人の考えなど、全てを一旦相対化することを要求する。このことは、あたかも自分がそれまでその上に立っていた足場が崩れ去って落下するような、あるいは大地がなくなって無重力空間をさまよっているような不安定感を伴う。こうした状況に耐えなければ、思考すること、考え抜くことはできない。

したがって、思考力を発揮するためには、こうした不快な感覚を避けたいという欲求を抑えなければならない。そのためには、自らをコントロールすることが必要となる。この自己コントロールも、思考力に関連する非認知スキルの一種だと言

えよう。意外に思われるかもしれないが、思考力は感情や欲求のコントロールと切り離しては語れないはずなのだ。

### ●自己コントロールの哲学

ところで、自らをコントロールするとはどういうことかについても、哲学者達は論じてきた。例えば、18世紀末のドイツの哲学者I. カントは、自分で自分を律する「自律」の働きが、道徳的に善い行為とはどのような行為かを知るための鍵になると考えていた。現代哲学でも、20世紀後半のアメリカで活躍し、現在も存命の哲学者H. G. フランクファートによる自己コントロールについての議論が注目を集めている。以下ではフランクファートの議論を掘り下げてみる。

まずはこの議論の前提となる、欲求と行為の関係についての一般的な捉え方について整理しておく。私たちは様々な欲求を持っている。欲求には、おいしいものを食べたい、ゆっくり休みたい、良い仕事をして昇進したい、生徒の思考力を育てたいといった、具体的なものから抽象的なものまで、また即物的なものから理念的なものまで、様々なものがある。これらの欲求が、私たちの行為の基礎となり、それを引き起こしている。

しかし、当然のことだが、全ての欲求が行為として結実するわけではない。そこには自己コントロールの働きがある。ラーメンを食べたいという欲求を、健康診断が近いからと我慢することもあるだろう。あるいは、朝からビールを飲みたいという欲求や、仕事をサボって旅行に行きたいという欲求など、通常は検討の俎上<sup>そじょう</sup>にすら上らない欲求も多々ある。私たちは通常、こうした欲求を抑えつつ、「良い仕事をしたい」とか「健康に長生きしたい」といった欲求に従いながら生きることを目指している。もちろん常に最善の選択ができるわけではなく、衝動的にラーメンを食べてしまう日もあるだろうが、それでも全ての欲求に奔放に従ってはいは、生きていくことはできない。言い換えると、私たちは従うべき欲求と、従うべきでない欲求を取捨選択しながら生きている。

フランクファートの功績は、欲求を取捨選択する私たちの心の働きについて、「二階の意欲」という概念を使って明快に描き出した点にある。「ラーメンを食べたい」「健康的な食事をしたい」

といった通常の欲求を「一階の」欲求と呼ぶことにしよう。フランクファートによれば、私たちは一階の欲求に加えて、「ラーメンを食べたいという欲求に従いたくはない」「健康的な食事をしたいという欲求に従いたい」といったより複雑な欲求を持つ。この複雑な欲求をよく見ると、「ラーメンを食べたい」という欲求に従いたい」というふうに、欲求を表す「～したい」が二度出てくる。この「二階建て」になった欲求をフランクファートは「二階の意欲」と呼ぶ。さまざまな欲求の取捨選択は、この二階の意欲を通じて起こる。つまり二階の意欲こそ、私たちの自己コントロールの正体なのだ。

フランクファートはこの自己コントロールについての「二階の意欲」説をさらに発展させ、こうした自己コントロールによって、まさに私たちの「自己」そのもの、換言すればアイデンティティが形成されるのだと論じている。また、彼は、特にアイデンティティの核心に関わる欲求の取捨選択は、「愛」や「気遣い」によって生じると指摘する。ここでの愛とは、大切な人への愛や気遣いのほか、抽象的な「理想」への愛や気遣いをも含む。私たちが旅行に行きたいという欲求を考慮せず毎日出勤するのは、家族への愛のゆえであり、あるいは愛社精神のゆえであり、あるいは、この論考を読まれている多くの先生方にとっては、教育という理想を愛し、次代を担う青年を育成するという理想を気遣うがゆえだということになる。

### ●「考え抜く」という理想への愛

非認知能力としての思考力という話題に戻ろう。深く思考すること、考え抜くことは、独特の不快感を伴うということを既に指摘した。その不快感は、自己否定の不快感であり、また、依拠すべき基盤がなくなるかのような不安なのであった。私たち人間は、こうした不快な状態に身を置きたくない、安定していたい、それゆえ深く考えることなどしたくない、という欲求を逃れることはできない。だからこそ、深く思考するためには、そうした欲求を抑えて自己をコントロールすることが求められる。

このことを、フランクファートの自己コントロール説について述べたことと関連付けてみよ

う。深く思考するために必要な自己コントロールとは、「自己否定や基盤喪失という不快な状態を避けたい」という欲求を抑えて、「もっと知りたい、もっと理解したい」という欲求に従うことである。そして、そうした欲求の取捨選択の根底には、学びへの愛、真理探究への気遣いといったものがあるはずだ。

このように考えるならば、思考力を育むためには、自己コントロール能力を育成することや、真理を探究する姿勢を涵養することまでもが必要だということになる。これは学習指導要領に言う狭義の「思考力・判断力・表現力」を越えて、「学びに向かう力」にまでまたがる複合的な力の育成が必要になるということでもあるだろう。このように言われると、結局は指導要領と同じ結論を確認しただけにとどまっているように感じられるかもしれない。しかし、そうではない。「愛」や「気遣い」と自己コントロールの関係、そして自己コントロールと深い思考の関係についての理解は、格段に精緻になったはずである。これらの力が互いを必要とし合う関係にあるからこそ、カリキュラム全体を通してこれらの力を育むことが重要だということにもなるのである。

## おわりに

### ●思考力をどう育てるか

本稿で述べてきたことを振り返っておこう。最初に指摘したのは、非認知能力としての思考力を育成するために、「思考力」は様々な層が折り重なってできているということに気づくことが重要だということであった。論理的な思考力は、様々な思考のための基礎となる能力ではあるが、それ自体はパターン認識と計算の能力であり、通常の認知的な「知識・技能」の一種なのだ。そうした「知識・技能」とは区別された、非認知能力としての思考力として、批判的思考や科学的思考、仮説的思考といったものが挙げられた。

次に、このような意味での思考力が、職業人に求められる「社会人基礎力」の構成要素としての「考え抜く力」と結びつくことを指摘した。考

え抜く力は、単なる論理的な思考力を越えた、自律的な問題設定と課題解決のスキルである。この意味での思考力は、哲学者ヘーゲルの言う「弁証法」の要素を持った思考力とも言える。ヘーゲル本来の弁証法は、「正・反・合」で折衷案を策定することではなく、対立状況に気づき、それを受け止めながら考えることである。「正解」に思える主張にも安易に飛びつかず、立ち止まって吟味する姿勢と言ってもよい。この姿勢が、思考力にとって不可欠であることを確認した。

最後に示したのは、対立状況を受け止めて吟味する思考のプロセスは不快感を伴うがゆえに、思考力を発揮するためには自己コントロールを効かせなければならない、ということであった。さらに、自己コントロールについてのフランクファートのモデルを参照し、自己コントロールがアイデンティティの形成に関わり、アイデンティティの形成は何かを愛することや気遣うことに関わっているということを指摘した。この観点から、思考力を育成することは、学校教育のより高次の目標としての「学びに向かう力」の涵養にも深く関わっているということも確認した。

このような広がりを持つ思考力を育成するためには、月並みではあるが、従来の知見を乗り越えた先に新たな知見を見出す喜びを体験させ、そのプロセスを振り返らせる、という探究的な学びの積み重ねが必要である。すぐには結果の出ないプロセスの反復は、教える側にも自己コントロールと探究への愛を要求するものとなるだろう。

## 参考文献

川瀬和也『ヘーゲル哲学に学ぶ考え抜く力』、光文社新書、2022年。

ハリー・G・フランクファートほか『自由と行為の哲学』、野矢茂樹＋門脇俊介（編・監訳）、春秋社、2010年。

Frankfurt, Harry, G. *Necessity, Volition, and Love*, Cambridge University Press, 2009.

小塩真司（編著）『非認知能力——概念・測定と教育の可能性』、北大路書房、2021年。